

猫蓑通信



第 98号
平成 27年
(2015年)
1月15日発行
(年4回発行)

新しさの追求

青木秀樹

新年おめでとうございます。

私の好きな新年の季語のひとつに「去年今年」があります。元旦を迎えるとたった一日で年の移り変わりを改めて実感するという感慨を込めた言葉です。毎日を平穩に過ごすことは老年に達した私には心地よいことですが、長く連句に携わる者としてはそれでよいのかという疑問が生じます。十年一日の如しとかマンネリズムという言葉が頭をよぎります。固定した形にはまって、独創性と新鮮さを失うことは連句人としての終焉を示すことになるでしょう。

東明雅先生は昭和五十八年の「季刊連句」創刊号に、「連句の復活とその将来」という一文をお書きになっています。昭和五十年代初頭の連句復活は奇跡的なことではなく、明治以降も社会の片隅で連句の伝統を守ってきた人々が居て、しかも明治維新から百余年を経て、西洋文学一辺倒であったものを見直す時期が来たので、連句が社会の表面にあらわれるようになったとされています。「万葉集」から百年以上経っ

て、停滞していた短歌が「古今和歌集」により復活し興隆した例と対比して示されています。

明雅先生は連句復興について「せつかく連句を復活させたからには、それを時代や社会に適合するように、第一、自分の気に入るように新しく変化してゆくべきである。いつまでも芭蕉の形骸を守るだけでは、それこそ本当に連句の命脈は尽き、片歌・旋頭歌・長歌、あるいは連歌と同様の運命に陥ることであろう。」と警告されています。

連句の新しい形式を創案すること、外来語や新語辞典に載る言葉を使うこと、現代社会のできごとを詠むこと等だけで連句が新しくならないことは、この三十年間の連句界の創作活動からみても明らかです。明雅先生は「連句が将来いかに変化・変貌しようとも、絶対に失ってはならぬものは、作品を作り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思う。」とも記されています。

私たちは連句の基本となる連句独自のメカニズム、すなわち「付け」と「転じ」の手法を、主に蕉風を手本に学んでおり、その中で連句の新しさを追求しようとしています。初心のうちには連句の基本の手法を、座を重ねてマスターす

●目次●

第百三十一回猫蓑会例会作品

明雅志脇起源心八巻……………2

平成二十六年芭蕉忌正式俳諧

脇起二十韻「水寒く」……………5

平成二十六年二十七年猫蓑会正式俳諧配役

恋句の作り方味わい方(下) ———— 東 明雅 6

恋句の出し方 ———— 東 明雅 9

国民文化祭あきた2014「連句の祭典」

日本連句協会理事賞受賞作品

半歌仙「内裏雛」……………生田目常義 捌 10

温故知新14…平安朝文芸はすべて座の文芸 11

事務局たより 12

ることが大事ですが、中堅以上の方には付け・転じの新しさを連句の座で追求することを心がけていただきたいと思います。連句の座の参加回数には限りがあり、それを補うものとして古典的な連句作品、現代連句人の作品をより多く読むことで、連句批評の精神を弁えることが可能になります。付け・転じの良し悪しを判断する目を養うとともに、自分では発想できない新しい付け・転じを発見することが可能になると思われます。連句の付き合いは自由な詩心から生まれるもの、猫蓑会のみなさまには高齢化をいたずらに嘆くよりも、発想を自由にしてマンネリを避けるように努めていただきたいと思います。

石巻の座

脇起源心「昔深川」

坂本孝子 捌

水の秋昔深川橋幾つ

明雅仏

雁の眠りを照らす月影

孝子

台所夜寒の母のせはしげに

鑑

ちと目をやるドアのメモ書き

恭子

ウ ATMコートの袖がじやまをする

曜子

櫓に寄り添ひ急ぐ国境

昭

足跡はあなたの上に重ねます

有子

五年周期で変る恋バナ

恭

温暖化日本も海に埋没か

鑑

蟻の暮らしを塚で調べる

恭

本好きで綽名は博士小学生

有

高田馬場の駅のメロデー

昭

花しだれ武家の町並人の波

曜

風船売りの作る象さん

有

ナオ ポートレースで遇ふ相棒の久しぶり

恭

酒杯を交す陰のサミット

鑑

指きりに嘘をつくなど祖母の声

曜

一言主へ初詣して

昭

七之助好みに染めし春小袖

恭

変幻自在なびく黒髪

鑑

碇泊のけふは港のあの女

恭

冷蔵庫だけ鎮座する部屋

全

貧富の差月さへ暑き世相なり

有

病癒えたと破る禁煙

昭

ナウ 僧正は夢の一字を大書して

いつしか彼は時の旅人

倂を慕ひて舞はん飛花の中

霞やさしく包む里山

有 鑑 孝 昭

連衆 荒木鑑 式田恭子 前田曜子

松原昭 佐々木有子

平泉の座

脇起源心「流亡や」

橘文子 捌

流亡や砂丘の果の鯛雲

明雅仏

秋寂ぶの海ひとりゆく月

文字

建前を祝ふ村人爽やかに

郁子

俄に背の伸びし長男

文伸

思ひきりサッカーボール蹴つてみる

雅子

そつと差し出す熱き生姜湯

酔山

労はられいたはり返すそれも愛

碧

双体道祖神ふくよかな笑み

伸

オフロードバイクで駆ける若き女医

山

児のお迎へは六時きつかり

雅

何処よりか夕やけこやけの曲聞こゆ

郁

厳しけれども優しき家元

山

花の寺木屋町を抜け訪ひぬ

雅

川を隔てて鶯の声

郁

ナオ 屋上に蜂を育てる管理人

碧

手造りパンの店に行列

雅

似顔絵は目鼻のまはり髭ばかり

山

蒙古斑なら僕も姉にも

伸

高山のケーブルカーの賑はへる

郁

棲み分け難き人間と熊

出動す自衛隊員消防士

見合写真はみんな破つた

アロハシャツ君と月夜のワイキキに

雅 山 碧 伸 雅 郁

夢か現か甘き香水

ナウ 心地よく土地の名酒に酔ひしれて

ノーベル賞は青き光に

健気なる少女褒むるか花爛漫

通訳検定通るうららか

連衆 東郁子 若林文伸 武井雅子

吉田酔山 松本碧

尾花沢の座

脇起源心「恋さまでま」

高橋豊美 捌

秋灯恋さまでまの七部集

明雅仏

名残りの月に髪を梳く女

豊美

きちきちを園児駆け出しつかむらん

遊民

コーヒーブレイク弾むおしやべり

淳子

ウ 冬ぬくし庵に畳の音がする

徹心

一輪挿しのさざんかの壺

了斎

青山に赤いBMWを買ひにゆき

一子

路上のキスをまたも撮られる

斎

彼誘ひふたり琥珀の道巡り

民

独立舌決蘇格蘭

一

呼びだされすごすご入る校長室

心

蹴つたボールはまつすぐに飛び

淳

花筏河口一面盛り上がり

全

春の潮を割つて立つ岩

斎

ナオ 強東風に踊りつつ行くちんどん屋

探訪記者の歩く浅草

ぬめぬめと刻む納豆お味噌汁

老いて寒中妙に元氣だ

水底に薄い日差しを差し込みて

人魚の夢を猿が喰ひをり

王様に指のサイズを尋ねられ

ダイヤも欲しいパールでは嫌

夕立の洗ひし空に月まろく

蓮茎で飲む祭神の酒

母はいつでも割烹着て

S.Lの終着駅は花の山

旅の土産に初諸子買ふ

連衆 内田遊民 上月淳子 佐藤徹心

鈴木了斎 山城一子

新庄の座

脇起源心「虚実皮膜」

鈴木千恵子 捌

味はひは虚実皮膜の新酒かな

紅葉かつ散る玉敷の庭

月を待つ望遠レンズ並びあて

氣遣ひながら煙草一服

三の酉残るおかめの美人なる

浪速の恋は夫婦善哉

夢でいい世界の果に連れてつて

電車ごっこはいつの時代も
漱石がああ小説を書いた家

心

一

全

斎

豊

民

斎

淳

心

民

一

斎

淳

密輸してまでペットイグアナ

怪しげな感染症が大流行

列のうしろに取りあへずつく

先駆けに若木の花のちらほらと

鐘霞むなり天空の城

ナオ子供らと原色で描く染卵

傘もささずに雨が大好き

サーファーはビッグウエーブ待ち望む

背比べするルピナスの塔

退職後農業せんと町を出て

あなたと呼べば回答へる

プラマイが零にならない片想ひ

ナイスバディに磨きかけたり

悠々と月まで潮吹く鯨

調査の船を追ひかける鷺

ウチケットを買占めてゐる鼻肩筋

渡りそびれた信号は赤

花ぶき懐中時計春刻む

幽かに響く蜂の羽音

象潟の座

脇起源心「筆は一本」

鈴木美奈子 捌

筆は一本筆は二本や秋の暮

秘蔵の古酒を酌み交はす月

夕化粧ゆれて雄蕊のきはやかに

入り組む露地に通曉の才

明

み

史

樹

史

明

明

全

み

明

史

明

樹

み

明

史

明

樹

千

み

樹

ウ 餅搗の白と杵とが持ち込まれ

幼馴染が囁すかけ声

待合はす場所の付箋を貼りつけて

セクハラギリにカマトトのふり

還暦が若葉マークでやつて来る

七つの海を巡る自分史

ひらげごま亜刺比亜びとに囲まれて

特定秘密保護法の怪

己が罪花の盛りに泥むとや

馬鹿笑ひする浜の馬鹿貝

ナオ 万物の命漲り春の雨

孤高なる画家白を活かせる

ブラインド窓の光を自在とし

初観音へ着飾つて行く

気風よき辰巳芸者の大発会

CEOの肩書に惚れ

年の差婚介護の情忘れずに

飼ひ猫ノラもとんと見かけぬ

夏の果月ひそやかに浮かびたる

山百合かとぞ過る残り香

ナウ ノーベル賞三人衆の物理学

絵風に託す少年の夢

故里はひらりひらりと花の舞ふ

風やはらかに響くハモニカ

連衆 高山鄭和 名古屋富子 松島アンズ

斉藤久美 秋山志世子

平成二十六年十月十五日
於 江東区芭蕉記念館

アンズ

久美

和

世

久

ア

富

和

世

久

ア

富

和

世

久

ア

富

和

ア

世

久

酒田の座

脇起源心「穂芒」や 生田目常義 捌

穂芒や呆け極まれば光るなり 明雅仏
 月白じろと霜降の空 常義
 芸術祭肩組み合ひて笑まふらん 佐紀子
 バロック音楽そしてコーヒー 泉子
 衣更いつとはなしに済みてをり 久美子
 汗拭く背中たのもしく見ゆ 霞
 鉄道員気は優しくて美男子で 吉文
 星占ひで探す式場 文
 祝ひ酒君の田舎の銘柄を 佐
 噂たちまち村の隅まで 久
 シナリオの材料探し苦労なし 泉
 新コンピュータの講習に行く 佐
 外つ国のひとに賑はふ花祭 久
 風やはらかに庫裏の広縁 霞
 ナオ 弥生尽何かいいことありさうな 泉
 リュックの底に五百円玉 霞
 野球帽少年草の匂ひして 吉
 舟を追ひかけ駆ける川縁 久
 初菖橋の名問へば面影と 霞
 ぼつぺんみたい君のほつぺた 泉
 会社辞め芸妓となりし女ありて 久
 海見ゆる丘越えてゆきたり 佐
 澄み渡る織月のもと虎落笛 全
 路地に影濃き小さき雪像 義

ナウロケット作る下町人情エンジンに

ウルトラマンを夢に見る頃

世の移り幹に刻みし花大樹

蝶のふはりと止まる掌の上

連衆 間佐紀子 青木泉子 副島久美子

高塚霞 永田吉文

月山の座

脇起源心「曲り家」 棚町未悠 捌

とんぶりや座敷童子の笑ふ声 明雅仏
 栗名月の浮かぶ曲り家 未悠
 答弁の総理も赤い羽根つけて 路子
 タラップ昇る軽き足取 弘子
 鮫鱈は肝だけ愛でるグルメ会 蕉肝
 霜焼けの掌をそつと包まれ 照子
 紅椿咲き誇る宮恋みくじ 路
 さつと済ませる道の清掃 照
 転任し生徒指導を拝命す 弘
 直角だけの抽象画描く 肝
 定式幕残し歌舞伎座ビルとなり 路
 ベルシャの猫が唯一の友 照
 廃校を訪へば爛漫花大樹 路
 奔放に舞ふ黄蝶白蝶 弘
 ナオ 風神の袋ゆさゆさ暮遅し 照
 ランドセル今パリで流行 肝
 叱らるるフオーク並びとは知らず 路
 冬の苺の価格高騰 弘
 爛酒を重ねるほどに熱くなり 肝

チークダンスの足がもつれて

抱き合ふベラとシヤガール天翔ける

永久に舟待つ舟つなぎ石

水底で月見る蛸の泡を吐き

冷やし西瓜にかぶりつきをり

ナウリハビりにアリアを歌ふ杖の人

東京五輪までは達者で

佐保姫の裾ひるがへす花街道

歩みゆつくり詠うららか

連衆 倉本路子 松原弘子 近藤蕉肝

田所照子

金沢の座

脇起源心「流亡」や 林転石 捌

流亡や砂丘のはての鯛雲 明雅仏
 名残の月がかかる鞍上 転石
 形よき千成瓢箪賞でつらん 良子
 干菓子の木型飾るウインド 佳之子
 ウ 冬構高き土塀に蒔して 健
 ふくら雀が急に目を開け 敦子
 黙しつつかと抱き合ふ二人連 之
 ヒモと言われて悪怯れもせず 良
 ちぼ社会手下の稼ぎをあてにして 敦
 法蓮華経唱へ小坊主 健
 ふつくらと焼きあがるパン夢に見る 良
 個性豊かなぬり絵いろいろ 健
 疫病のはやる世の中花の冷 全
 逃げ水追ひて地平線まで 良

平成二十六年十月十五日
於 江東区芭蕉記念館



正式俳諧配役全員。明雅先生の奥様と。今年四月、亀戸天神社藤祭奉納正式俳諧でも同じ配役で興行予定

ナオ参加しよバスのツアーの出開帳

一座敷童の落ち着かぬ尻

がらくたを珍品ですと買はされる

下手な鉄砲いくつでも打ち

お土産はパリで仕立てた銀狐

嘘で固めた夫婦生活

色じかけさぐる社外秘バスワード

財をなす人かなり締め屋

追出しのやぐら太鼓に夏の月

蕎麦の老舗で冷酒を酌み

散歩に行かうと猫がすりよる

碑をうつむるほどに花吹雪

ネクタイ五本春のベストに

連衆 本屋良子 染谷佳之子 由井健

武井敦子

之石敦良之全敦之良健良之良敦

平成二十六年俳諧芭蕉忌 正式俳諧

俳諧連歌

脇起二十韻「水寒く」

水寒く寝入かねたるかもめかな 翁

街のざわめき運ぶ風 了齋

紙皿は時計廻りに配られて 文字

ふいにひらめく数式の解 蕉肝

月の駅鞆ひとつで旅人に 孝子

ベカンベ祭忘れじの君 清子

つつましき婚約指輪さやかなる 常義

音楽番組録画しておき 敬子

武蔵野の歴史を秘めて絹の道 昭

畑仕事は祖父と父とで 恭子

ナオ 乾杯とジョッキ合はせるビアホール 酔山

夏の日暮れて上りくる月 富子

藍染の作務衣に猫のじやれかかる 弘子

戻つておいで僕のところへ 有子

スピードのキングに似たる色男 転石

満塁ホームマー九回の裏 ひろみ

ナウ 露座仏に小さきおにぎり供へられ 明子

春の暖炉に読みふける本 雅子

雅なり遠く眺むる花の波 秀樹

山から山へかかる初虹 執筆

平成二十六年十月十五日 首尾
江東区芭蕉記念館に於いて興行

平成二十六年二十七年
猫蓑会正式俳諧配役

宗匠 青木 秀樹

脇宗匠 近藤 蕉肝

執筆 松島アンス

知司 吉田 酔山

副知司 名古屋富子

座配 全

花司 野口 明子

香元 松原 弘子

配硯 佐々木有子

全 江津ひろみ

老長 橘 文字



平成二十六年十月十五日、俳諧芭蕉忌正式俳諧

恋句の作り方味わい方(下)

東明雅

平成三年(一九九一)十一月一日刊

『季刊連句』第三五号より転載(前半は前号に掲載)

三 現代恋句の作り方

次に私は根津芦丈先生から教えていただいたものをもとにして、現代連句において恋句を作る場合の心得について、すこしお話ししてみたい。と申しても、大体は今まで話して来た芭蕉の恋句から外れたものではないが、その前に一つ考えなければならぬことは、芭蕉の時代からまさに三百年、その間、社会・文化の変化は大きく人々の恋に対する意識もまさに百八十度転換していることである。

芭蕉の住んだ封建社会は、その制度維持の目的から、男女の自由な恋愛を否定し、男性支配の下、女性を家庭内にしぼりつけ、女性は子供を生み、それを育てる道具として、一個の独立した人格として認めていかなかった。

明治以後、ことに第二次大戦以後、旧い社会とともに残存していた封建的思想が打破され、民主主義の名の下に、個人の自由・平等の権利が拡大され、恋愛・結婚は自由となり、最近では女性の社会進出とともに、その力強さ・逞しさが目立って来ている。

芭蕉の時代には世の常識であり、良識であっ

たものが悉く否定された。「不義はお家の御法度」・「男女七才にして席を同じうせず」・「かよわきものは女」・「女は若い時には親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う」・「女三界に家なし」・「貞女二夫にまみえず」とか、さまざまに言い古されて来たものが、現代では全くナンセンス、あるいは逆になって来た。

江戸時代の恋愛には、常に罪の意識がつきまとい、それを敢てするところに、あわれが生まれ、しおりがつきまとったのであるが、現代では恋愛には罪の意識はなく、個人の快楽となり、あわれ・しおりも影をひそめたかに見える。

しかし、昔から言われている「恋の本意」に、
恋の本意とは人を恋ひあくがれて、及びがたく、叶ひがたく、身も玉の緒も絶え入るやうに思ふ心を本意とす。男女たがひに其心なり(産衣)

とあるように、時代・社会がどんなに変わろうとも、異性を慕い、あこがれる男女の真情は不変で、これは人間自然のものである。

徒然草には、

「露霜にしほたれて、所定めずまどひ歩き、親の諫め、世の謗りをつゝむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ……」

という恋の至情は現代でも、そのまま通用する

だろう。社会的また時代的なものは違っているも、その本質は変化しないから、やはり「しおり」や「あわれ」を見出す場所も多いだろうし、「軽み」の句だって、作るのには事欠かないのではなからうか。

そこで、芦丈先生の恋句に関する教えの第一として、先生が山襖やまあはせ二十号に掲載された問題を取り上げることにする。

①男が女の自の句を作ること

篠の屑家も住めば愛の栖

肥桶の片棒かつぐも嬉しげに

洞光

芦丈

この付句ははじめは「嬉しくて」であったが、それでは女の自の句になる。男が女の自の句では蕉風の埒外のものだから一直他の句にした。即ち、これは恋句には限らぬが、男性が、女性の自の句を作ることはいけなと言われるのである。この問題を取り上げて論じたのは管見によれば杉内徒司氏で、氏は「季刊連句二十号」でこのことを取り上げられ、

あの月も恋ゆへにこそ悲しけれ

露とも消えぬ胸のいたきに

翠桃

芭蕉

冬至の縁に物おもひます

けはへどもよそへども君かへりみず

土芳

芭蕉

などの例をあげて、芭蕉も女性の自の句を付けているから、自分が今まで女性の自の句を作ってきたことに安心したと述べられ、さて、芭蕉が女性の自の恋句を作ったのは、その当時、連衆として俳諧の座に連なる女性の数が現代に比し、極めて少なかった為であろうと推論され、そして、現在では、「一句の主人公は常にハわれVでなければならぬ」という波郷の言葉に従って、このような性の倒錯は不可とする説に傾いていると述べておられる。これはまことに妥当な結論であるが、そもそも自分以外のことを自分自身のこととして詠んではならないという教えは、去来抄の中に

玉祭うまれぬ先の父こひし

という句を詠んだ作者に対して、去来が下している。これはもし、他人のことを自分のことのように詠めば、悪くすると書を招くことになろうと言っている。この句の作者は実際はつい最近その父を亡っているのに、この句だけから判断すると、いかにも母が作者を懷妊中に父は死亡したかのように解されるからである。

このようなことが、芦丈先生の性の倒錯論の根拠となっているものと思われる。今は男女平等の世であり、差別をつけるのが悪いと言われるかも知れない。たとえば、流行歌なども、女性歌、男性歌の区別も次第になくなってきている御時世である。

ただ、やはり、どうしても気持ちが悪いので、

男性が女性の恋句を作る時は、それを他の句に出来ないか、一応考えて、どうしても出来ないというならば、自の句でも仕方がないだろうと、こう考える次第である。

②三句以上、恋句が続く時の配置

恋句は必ず二句以上、五句まで続けてよいというのが式目である。大抵の場合、恋は二句で終り、五句まで続けるのは「恋つまり」と言われて嫌われるということになっている。しかし、一卷が盛り上がった場合には、難しい恋の句を四句も五句も続けるのを例の「逆茂木」と言っていて、興味あることとしている。

たとえば、次は「新炭俵」の「落葉掻く」の巻子才の四句目からの一連である。

- a 風呂飯寝ると言ってみたよ 淳子
- b 友とする座敷わらしに雪女 淑子
- c たれ目うけ口それが魅力で 正江
- d 披露宴新郎妊婦しづしづと 好敏
- e 「敬天愛人」扁額の文字 正江

aは一句には恋の意はないものの、何か恋句を誘っている。これが恋の呼び出しである。

一座でこのような句が出されると、次の付句では、はつきりした恋の句を詠むのが望ましいとされ、(前句、恋とも恋ならずとも片付がたき句ある時は、^{かならず}必恋の句を付て、前句ともに恋になすべし、三冊子) bは「雪女を友とする」

で、はつきり恋の句になっている。

cは前句の雪女のアシライの句で、雪女の容貌を述べているのであるが、dは一転して新婦披露宴の景となった。近頃は結婚式の時はすでに妊っている新婦が多いそうで、新郎新婦をもじった新郎妊婦は、世相に対する痛烈な皮肉であるが、一方、大きいお腹を一生懸命かくそうとする花嫁の姿は、考えようによつては何か「あわれ」である。eは恋離れ、表面的には、ただ扁額の文字を示して、一句だけでは恋の意はないのであるが、前句と続けると、結婚式場の一景となる。しかも、この文句に西郷南洲の遺語を引いているのも、味があり、恋離れとして上々の句である。

この一連を見ると、aは自の句、bは向付の自他半の句、cは他のアシライ(雪女の容貌を叙べた)、dは他で其人の付け、eは場の句(人情無し)で、其場の付けとなるであろう。このように、自他場をちゃんと振り分けると、三句、四句、五句と恋の句が続いても、境地が次々に変化して、転じが利き、一続きのそしりを免れることができる。

③恋の二句目で笑わせる

芦丈先生の口癖に、「恋の二句目で笑わせる」というのがあった。これは真面目なしおらしい句ばかりでなく、ふざけたおもしろい、時には人が吹き出すような滑稽な恋句を作れというわけであるが、その二句目とはどんな所か。歌仙

では大体、裏と名残の表の二ヶ所に恋句を出すのが普通であるが、大体において、裏の恋句は穩かに、名残の表の恋は濃厚で、盛り上がり、一卷のヤマ場になるような句を詠むのがならわしである。だから、人を笑わせるのは、大体名残の表の恋句が多い。

そして、一ヶ所しか恋が出ない場合には、二句のうち後の付句となる恋に、おもしろい滑稽・諧謔の意を含んだものを出せということらしい。芦丈先生の作品を読んでも、昭和三十一年の「裏鳴戸」の巻では、裏が、

姑の気にも入りし後添 一海
乱箱衣桁と狭い闇ながら 芦丈

という、わりにじみな恋句であるのに対して、

撥さし置いて老妓さゝやく 芦丈
うなづきはしたが皆までよめぬ文 一海

という、おもしろい恋句が名残の表に出ている。三味線の撥を置いて老妓が何かひそひそと囁く。相手の男は、何が書いてある手紙か読めないのだが、それをかくして、いかにも読めたような顔で点頭しているという、おもしろい恋の句で、滑稽であり、また、字が読めないのをかくして苦労しているさまにはあわれもあるではないか。

このように、人を笑わせ、楽しませるのは滑稽であり、諧謔であり、たしかにそれは連句の

最も重要な文芸性であった。

もともと、連句は「俳諧之連歌」と呼ばれていたものである。これは滑稽な連歌という意味である。連歌は初めは滑稽から出発したのであるが、時代を経過するにつれて、真面目で高雅な文芸になってしまったので、滑稽を主とする連歌は格式の低いものとして取り扱われるようになった。それが後には「俳諧」と呼ばれ、連歌と対立する別のジャンルになったものである。「俳諧」となつてからも、また、連歌に近づけ、品のいいものとし、且つ教訓的なものにしてしようとしたのが松永貞徳である。それに対して西山宗因は滑稽と俳言に重点を置いて、自由な俳諧を作つたので、その弟子たちは放埒に流れ、無政府状態になった。そこに現われたのが芭蕉である。

上おきの干葉刻もうはの空 野波
馬に出ぬ日は内で恋する 芭蕉

「馬に出ぬ日は」のは、字の中に、この馬子の生活が、馬に出さえしななければ、必ず「内で恋する」事にきまつているような、事の反覆、もしくは習慣を示唆する特別な意味が籠められ、そこから又作者がこの馬子を取り扱っている、フモールも湧いてくると小宮豊隆氏が述べておられるように、ただ笑わせるだけではない、笑いの中にしみじみとしたもののあるユーモア・ペーソスが見られる。

諧謔は、詩の最高理念である。

四 現代恋句の鑑賞

忘れたき人忘れ兼ねぬて きよみ
王冠を賭けし世紀の恋もあり 魚魯
ミンクのコート露地を抜けゆく 芹川

小出きよみさんは、昭和三十八年から根津芦丈先生に連句を学び、信大連句会のメンバーの一人である（現在は花野連句会）。昭和五十七年に「恋句曼陀羅」という本を刊行された。これはきよみさんを中心に、当時の信大連句会で作られた歌仙の中から、恋句を抜萃されたもので、現代連句の恋句で特筆すべき傑作が多く掲載されている。この「恋句曼陀羅」を除外しては現代の恋句は語れぬであらう。

芦丈先生も、この一連に対して、「近頃出来た恋句で、いささか誇るに足るもの」とされ、此前句は、英国の皇室にての出来事で、誰もが知り過ぎる程の事実である……このように何物を捨てても惜しくないという心情はみな一つである。この前句に対して、「ミンクのコート露地を抜けゆく」心憎いほどの付味である。…と絶賛しておられる。

思うに、この恋句は、その用語・措辞の堂々たること、まことに丈高い句であるが、もともと、「世紀の恋」とか、「王冠を賭けた恋」とかは、新聞とかにもよく使われた、いわば慣用語であろう。しかし、これらよく目についたものを纏めて一句としたのは、この作者池田魚魯さんの

やはりお手柄であり、昭和も四十年代に入つて、漸く新しい現代連句の恋句が生まれたと言つことができよう。

これに対する田淵芹川さんの付句は、王冠とミンクのコートがよく位付になつていて、しかも、このミンクのコートが露地を抜けて行くという所に、この女性の姿を想像させ、「あわれ」と「しおり」がある。魚魯先生の句は芹川さんの付句を得て、初めて光りを放つことになるのである。

既に述べたように、俳諧の恋句は、前句と付句二句で、小説を書くのであるから、言葉の使い方、場面の切り取り方が特に大切である。そして、何より大切なのは新しい感覚であろう。新しい我々の作品から例をあげる。

青道心の襟元の艶

明雅

気がつけばあれが初恋初給

孝子

秋祭り俄氏子のかしこまり

杉亭

雑沓まぎれ嫂の瞳よ

正江

過ぎし恋歪んでダリの絵のやうに

干町

ただ、詩の最高境地である諧謔の境地はなかなか到達出来ないが、たとえば、

女ざかりの五十ウンオ

遊

ヒモはなしせて頭の毛が欲しい

清子

などはいかがであろうか。

(未定稿)

解題●『季刊連句』第三五号から転載の、東明雅先生の「恋句の作り方味わい方」の後半。前半は前号に転載済み。「作り方」といっても、この一文は決して「こつすればいい恋句が作れる」という技術論、ハウツーではない。そのことは前号掲載分で、連歌の發祥まで遡った第一章、芭蕉俳諧の恋句を論じた第二章については明らかだ。「現代恋句の作り方」をとりあげた今号掲載分も、決してたんなる技術論ではなく、「不易流行」についての、きわめて本質的な考察だといえる。芭蕉俳諧は当時の生活の最新の「流行」を掴み取っているが、それが現代の私たちにも感動を与えるのはその「流行」が人間の「不易」に根差していることを同時に表現し得ていたからこそだろう。「不易」あつてこそその「流行」だ。

先生は「芭蕉の時代からまさに三百年、その間、社会・文化の変化は大きく人々の恋に対する意識もまさに百八十度転換している」ことを指摘しておられる。そして、この一文が書かれた一九九〇年代初頭からすでに四半世紀が過ぎ、その間、社会環境情報流通手段、生活感情などの変化はますます加速している。ここに収録されている当時の作例も、現

恋句の出し方

東明雅

平成三年（一九九一）一月十五日刊

『猫髪通信』第二号より転載

【Q】

歌仙でも二十韻でも、それぞれの進行表を見ますと恋句を出す場所が示してありますが、こ

在の目で見れば、すべてが必ずしも「新しい」とはいい切れない。

「何より大切なのは新しい感覚」だが、その新しさがたんなる「目新しさ」に過ぎないのか、それとも「流行」を介して「不易」を掴み取れているのか、さらに長い時間を経た後にしか判定しきれないだろう。真摯にものを考えるほど、同時代に対する判断評価は難しいものになる。それでも、私たちはそういう覚悟の上で「日々新しい」不易流行の俳諧を追求して行きたい。先生がこの一文をあえて「未定稿」としておられる背景には、おそらくは同様のお考えがあるのではないだろうか。

この一文にある「諧謔は、詩の最高理念である」とは、まさにマニフェスト的な言葉だ。これはもちろん「面白おかしければ詩だ」というような意味ではない。諧謔を詩としてとらえ、詩として表現できれば、それがそれが最高の詩になるということだ。明雅先生が私たち弟子の作品を批評されるにあたって、「この句のどこに詩があるのか」「この付け方のどこに詩があるのか」ということを、何よりも厳しく追及しておられたことを思い出す。(斎)

れ以外の場所、例えば表や名残の裏に出してはいけないのかどうか、またその理由についてお教え下さい。

【A】

歌仙及び二十韻の季題配置表には、それぞれ、裏と名残の表に恋句を出すようになっていますが、これはまったくの初心の人に対して一つの例をあげたままで、決してこの通りにせよとい

うわけではありません。誰もがまったく同じ場所に恋句を出すということになれば、それこそ千篇一律で、おもしろ味も新しきものもないものになってしまうでしょう。

式目にはずれない限り、どこにでも恋句は出せるのですが、この場合の式目とは、

- 1・歌仙でも二十韻でも一卷の中に必ず一ヶ所は恋の句を出すこと。
- 2・表六句には神祇・釈教・恋・無常その他印象の強いものを遠慮する。
- 3・恋句は二句以上、五句まで続けることができ、三句去りである。

という、この三つであります。

だから、まず表六句には恋句を出さぬのが普通です。けれども、これにも例外があつて、

- 4・発句だけに限つては神祇・釈教・恋・無常その他表六句に禁ずるものを出してもよい。
- 5・発句にもし恋句が出たら、脇句は必ずこれに応じて恋句で受けなければならぬ。
- 6・その場合、第三になるとはつきり恋の意から転じなければならぬ。

という式目があります。

だから、歌仙でも二十韻でも、発句に恋の句が出たら、脇の句でもそれを受けて恋の句を出さねばなりません。

しかし、このように表六句に恋句が出るこ

は極めて稀で、大体は裏の二句目あたりから出るのが普通でしょう。と言うのは、裏の折立から恋句を出すのを、昔の人は待兼の恋と言つて嫌つたからです。もつとも、現代の連句ではこれを禁じておりません。

それでもし、八句目、九句目に恋句が出たら、次の恋句は三句去りで十三句・十四句目、次はまた三句離れて十八句・十九句目、このようにして、二十三句・二十四句目、二十八句目・二十九句目、三十三句目・三十四句目と、歌仙では六回は恋句を出すことができるわけですが、こんなに恋句ばかりを出すので、普通は名残の裏はなるべく遠慮し、大体、裏一ヶ所、名残の表に一ヶ所、計二ヶ所位出すのがよいとされておりますが、時と場合によつては、三、四ヶ所出した例、また、名残の裏にも恋句を出した例が、芭蕉の作品にもあります。

二十韻も大体、以上に準じて考えてよいでしょう。二十韻でも恋句は、最大、四回は出せますが、普通は裏と名残の表に一回ずつが最も妥当と申せましょう。しかも、この一方を欠いても決して異常ではありません。とに角一卷の中に一ヶ所恋句が出ておればそれでも式目には反しないのであります。

解題●この一文は東明雅先生が恋句に関連する式目をまとめたもの。本来の式目は明快。恋句に限らず、「季題配置表」その他、初心者指導上の方便に過ぎないものが、いつのまにか式目に準ずるルールと受け取られ、それが連句をがんじがらめに難しくしてしまうという本末転倒を排さねばならない。(斎)

国民文化祭あきた2014「連句の祭典」
日本連句協会理事長賞受賞作品

半歌仙「内裏雛」 生田日常義 捌

内裏雛年取らぬ俣出でましぬ 咲子
泥を啜へて燕来る軒 よう子
蒲公英を姉と摘みては竹籠に 鄭和
鉄道唱歌どこで終はるか ぼくる
月の宴大皿に盛る大鱸 常義
自慢の濁酒おもむろに注ぐ 暎
お会式の団扇太鼓に誘はれて う
軽のトラックゆるり発進 和
復興も景気も宣伝程でなく 義
秋田小町はわたくしのこと 暎
ひそやかに夢み続けた略奪婚 義
病院の窓冬の虹立つ 暎
父賜ふ破魔矢に月の影さして 和
粥に炊き込むすなすずしろ 和
パレットに置けば滲める縹色 義
希望を載せて旅は列車で 義
峰々は若葉の花にむせかへり 暎
お気に入りですピケの夏帽 和

連衆 白井暎子 秋山よう子 高山鄭和
松田ぼくる

平成二十六年三月十二日 首尾
於 横浜市磯子杉田劇場C会議室

温故知新

14…平安朝文芸はすべて座の文芸

●まことにいみじうれしきこと

清少納言『枕草子』長徳二年（九九六）頃

第七十八段 頭中将の、すずろなる

（前略）見れば、青き薄様に、いとよきよげに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

蘭省花時錦帳下

と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、いかにかはすべからむ、御前（中宮定子）おはしまさば、ご覧せざるべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名（漢文）にかきたらむも、いと見苦しど、思ひまはすほどもなく責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に消え炭のあるして、

草の庵を誰か尋ねむ

と書きつけて取らせつれど、また返事も言はず。

（中略）

「今は、御名をば、草の庵となむ、付けたる」とて、急ぎ立ちたまひぬれば、「いとわろき名の、末の世まであらむこそ、くちをしかなれ」と言ふほどに、修理の亮則光、「いみじきよるこび申しになむ、上にやとて、まぬりたりつる」と言へば、「なんぞ。司召なども聞えぬを、なにになりたまへるぞ」と問へば、「いな、まことにいみじうれしきこと

昨夜はべりしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目あることなかりき」とて……（後略）
〈角川ソフィア文庫『新版枕草子』上巻より〉

解題●頭中将藤原齊信と清少納言は、つまらぬ噂のせいで仲違いしていたが、しばらく経って、気の合う友を失つて物足りなくなつた齊信がちよっかいを出す。女ながら漢文の素養があることで知られた清少納言のもとに、白氏文集から抜き出した一句を送りつけ、その続きを問い合わせてくる。続きの対句「廬山夜雨草庵中」をそのまま物知り顔に答えるのはダサいし、期待されていることでもないと考えた彼女は、とっさの思いつきで、それを和歌下の句の七七に翻案して「草の庵を誰か尋ねむ」と応じた。これが齊信周辺の男性サロンで大受けする。衆知を集め、これへの応答を考えるが、この漢和の対があまり見事に決まっているので、うまく先を続けることができない。対応をあきらめ、降参してこれから彼女を「草の庵」と呼ぼう、などと盛り上がり、齊信は喧嘩の矛を納めて仲直りしようと思う。清少納言の勝ちだ。前夫の則光まで、まるで出世して浮かれたような様子で彼女のもとにやってくる。
則光は、夫婦別れた後も清少納言と兄妹のようにならぬ仲良く付き合っていることから、サロンの皆から「せうと」と呼ばれて親しまれている好人物。本人は文芸に関心も資質もまったくないが、前妻をほめそやされて「せうと」としての面目をほどこしたと、大喜びで齊信周辺の様子を報告する。
この話はさしずめ、漢和連歌事始め、といったところだが、こういう具合に『枕草子』は、和歌の贈答や、短連歌のやりとりをめぐるエピソードを満載しており、文芸をめぐって人間関係が紡ぎ出されて行く様が活き活きと描かれている。

それでは、このような平安朝貴族社会の文芸サロンとはどのくらいの規模のものだったのだろうか。現代の私たちは、つい現代の文壇とその読者層のようなものを想像しがちだが、実際は大きく異なる。

このエピソードに出てくる齊信のような「殿上人」は、清涼殿に詰めている間の暇つぶしのような形でこつとした「文芸活動」をしているわけだが、このように昇殿を許された「殿上人」の定員は三十人に過ぎない。これに皇族と両者の妻子などを加えても、上流貴族と言える人数はせいぜい五、六十人だ。昇殿できない中流貴族と地方官などの下層貴族、その妻子（清少納言もその一人）を加えても、平安朝貴族の人数は三、四百人に過ぎない。そんな規模の貴族社会のなかで、文芸的関心、素養、資質を持っている人はその一部だけだ。『枕草子』からは、そのこともよくわかる。つまり、一つの時点をとれば、平安朝文芸サークルの全構成人数は、どうみても現在の猫養会の全会員数より少ない。

作者も読者もこれきりの範囲だから、優れた歌や、機知と情趣に富んだやりとりなどがあれば、たちまち全体で評判になり、それをふまえてまた別の歌ややりとりが生まれる。面白い物語やエッセイが書かれれば、回し読みされ、書き写され、世代を超えて受け継がれ、その上でまた新たな歌や物語が作られる。このように狭く濃い関係の中で、文芸がぐるぐる循環しながら、熟成され、増殖して行く。

つまり、数多くの勅撰和歌集、歌物語や日記文芸などを含め、平安朝文芸というものは、すべて典型的な「座の文芸」だと言っても過言ではない。

『枕草子』は清少納言の自慢話集、などと受け取られがちだが、彼女は敬愛する中宮定子をめぐる「座」の魅力を、ただ無心に忠実に書き残しただけではないか。だからこそ面白く、価値がある。（斎藤）

●第百三十一回例会（芭蕉忌・明雅忌）が開催されました

昨年十月十五日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて、第百三十一回例会（芭蕉忌・明雅忌）が開催されました。芭蕉忌正式俳諧の後、八卓に分かれて東明雅先生発句による脇起源心の実作を行いました。当日の源心八巻は今号のP2～5に掲載しています。

●第二十九回国民文化祭あきた2014 県民参加事業文芸祭「連句の祭典」が開催されました

昨年十月十二日（日曜日）、秋田市協働大町ビルにて、募吟各賞授賞式、続いて出席者百四十五名が二十八座に分かれての半歌仙実作会が行われました。その前日には、象潟町蛸満寺など、芭蕉の足跡を辿る吟行会と、前夜祭が行われ、アトラクションとして秋田の郷土芸能などが披露されました。

●受賞

左記、第二十九回国民文化祭文芸祭「連句の祭典」にて、生田日常義擲、半歌仙「内裏離」の巻が日本連句協会理事長賞を受賞しました。同作品は今号のP10に掲載しています。

●今後の予定

●第百三十三回例会
藤祭正式俳諧興行・二十韻実作
四月二十二日（水曜日）
於 魚戸天神社

●第二十五回猫蓑同人会総会



六月二十一日（日曜日）
於 新宿ワシントンホテル新館三階

●猫蓑基金にご協力ありがとうございました

瀧澤尚子様 平成二十六年十二月 一万円
基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金 普通預金 3376045

●訃報

●二十六日十月、涼月庵中田あかり宗匠 逝去。
●二十六日十一月、会員の岩垂景翠様 逝去。
●二十六日十一月、会員の篠原達子様 逝去。
●二十七年二月、会員の諏訪欣二様 逝去。
つつしんでご冥福をお祈りいたします。

●住所変更

前田曜子 東京都世田谷区に転居

●新会員

佐久間晟 二十六年十二月入会

●俳号変更

小野フェラー雅美 「平林柳下」に変更

●訂正

●前々号（第96号）P8 二十韻「木漏れ日」挙句を「塔より望む海のうららかに」に訂正。
●前号（第97号）P1二段目第四行「芭蕉の恋句」（中公新書）を「芭蕉の恋句」（岩波新書・特装版もあり）に訂正。

●前号（第97号）P3 歌仙「旅寝の夢」ナオ九句目を「そとと背で受け取つてゐる海苔弁当」に訂正。
●前号（第97号）P4 歌仙「ありがたや」ウ六句目

を「鱗粉舞ふかに凍て月の影」に、またナオ九句目を「いつしかに母の遺産の減りてゆく」に訂正。

以上の訂正部分については、猫蓑会オフィシャルサイト「資料庫」内のバックナンバーファイルでは修正済みです。

●『猫蓑作品集』第二十三巻について

今後の隔年発行を決めた第二十二巻の刊行から二年目になりますが、理事會にて、今後の刊行形体、内容編集体制など、再度抜本的な検討が必要とされたため、第二十三巻に向けた作品募集などを当面停止します。

●バックナンバー

●『猫蓑作品集』バックナンバーご希望の方は鈴木千恵子まで。
●『猫蓑通信』バックナンバーは創刊号以下すべて猫蓑会オフィシャルサイトで閲覧できます。

●猫蓑会オフィシャルサイト

<http://www.neko-mino.org>

季刊

『猫蓑通信』第九十八号

平成二十七年一月十五日発行

発行人 猫蓑会刊
青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社